

中津川市地域医療実習 感想文

鹿児島大学 3年生 氏名 田村

昨年の夏期地域医療実習に引き続き、今回の春期地域医療実習にも参加させていただきました。前回の実習の経験から、私は児童精神科の領域に関心を持つようになりました。また、他県の地域医療実習を通じ、患者さんを癒し、支えるということは一医者として病院の中で医療を提供するだけでなく、地域に出て、介護や行政、地域に根差す様々な関係者の方との交流とネットワーク形成が必要であるという学びを得ることができました。このような学びをもとに、再度、中津川市の地域医療実習に参加しようと考えた理由は大きく2つあります。1つ目は、児童精神に関心を持つきっかけとなった「つくしんぼ」に再度伺うことで、自身の思いを再確認するとともに、現場で働かされている保育士さんの仕事を見、話を伺う、通われているお子さんや親御さんと交流することを通じて、児童精神の領域に進むうえでどのような行動をこれからしようか、その指針を手に入れることです。また2つ目としては、医師が経営されているB型作業所の「パーソナルドア」を見学することを通じ、病院を越えて患者さんと地域を支えるにはどのような選択肢があるか学ぶということでした。このような目標を掲げ、参加させていただいた今回の実習ですが様々な気づきと学びを得ることができました。以下に簡単ですがその内容を記載いたします。

まず、「つくしんぼ」の療育に参加することを通じて、以下の様な学びを得ることができました。前回はお子さんの発達を促すには、何よりも療育を通して「楽しい」という思いを持ってもらうことが第一歩であるという気づきがあったのですが、今回はそのような療育を提供する保育士の方々の働きかけに注目することで多くの気づきを得ることができました。例えば、お子さんが活動に興味を失わないよう、その場で内容を少しずつ変化させる。(例えば、滑り台を使った療育では、その前にトンネルを途中で設置することで新たな刺激を与えるとともに、異なった筋運動が発達できるようにしている等)また、そのような遊びの中で、ルールを守ることや我慢することを経験してもらい、今後の社会生活にうまく慣れるよう働きかけを行っているということに気が付きました。また、児童精神科医は不足しており、診察を受けるために遠隔地に行く必要があったり、数か月待つ必要があるという実情も伺うことができました。

次に「パーソナルドア」での見学ですが、蛭川診療所で勤務されている榎間先生が運営されている就労継続支援B型作業所で、シイタケの栽培を行われていました。ここで伺った内容で新鮮だったのが、中津川市において作業所数は不足しており、利用を望む多くの方がいらっしゃるということ、また重い障害を持っている方は、他の作業所では中々雇ってもらえないという実情があるということでした。そのような中で経営者が医師で職員も看護師であるパーソナルドアでは、このような方々でも雇用ができ、利用者の方も安心して勤務できる環境であるということを知り、医師として福祉分野にも連携することで地域を丸ごと支えることができるポテンシャルの大きさを実感することができました。

最後に「阿木診療所」に再訪し、伴先生の下で外来診察の陪席と患者さんへの問診を通じて得た経験を記載いたします。前回に引き続き、患者さん一人一人にじっくりと時間をかけ、症状のみならず、日常生活や困りごとなどまで聞いている先生の温かな態度を拝見し、将来私もこのような態度で患者さんに接したいと襟を正す思いでした。また、前回と同様、先生の診察前に患者さんに別室で問診する機会をいただくことができました。実は前回の問診では、「患者さんの困りごとを聞きたい」、「患者さんが医療に求めていることを聞きたい」との思いが強く、空回りする場面もあったのですが、今回は、「私は何者で、何を目的に中津川にやってきたのか?」、「患者さんがどんな生活をされているか」を自然な会話の中で伺うことができました。そのような会話を通じて生活全般で困っていることを伺う中で、診察につながるような病気に関する悩み事をスムーズに伺うことができました。

以上のように今回の実習を通じて前回にはない新たな学びを得ることができ、大変充実した日々

を過ごすことができました。また、このような学びの場を提供して下さった伴先生、榎間先生、「つくしんぼ」の職員の皆様、高齢支援課の皆様、2回目にもかかわらず参加を快諾し温かく迎え入れて下さった中津川市地域総合医療センターの皆様には感謝の念がたえません。本当にありがとうございました。